衣生活の現状

中　原　政　枝

1．衣生活の歩み

我が国には伝統の和服と（平面構成）と、明治時代に入ってきた洋服（立体構成）の二様式がありますが、1945年（昭和20年）を境にして洋服が日本人の主流をなしており、現代の衣服においては、作る時代からすでに完成したものを買う時代へと移行し、素材の面でも従来の天然繊維から化合繊維へと大きく転換し、往年には衣服は貴重品として消耗するまで使用する衣服でしたが、現代は使い捨て商品としての仲間入りをしました。

そこで、日本の既製服は、明治14年頃官服や古着をとりあつかっていましたが、新品も作られるようになり、かなりの数量が出まわるようになりましたが、「つるし」と呼ばれ、オーダーにくらべて人気が低調でした。

第二次世界大戦中は、婦人の服装においては、美しい物は敵視され、「勝つまでは、欲しがりません」を、合言葉に和服を更生して、筒袖モンペが制服化し着用しておりました。

また、衣料切符制度が実施されましたが、切符はあっても品物がないといった状態でした。

1945年（昭和20年）８月15日終戦と共に、日本の戦後は始まり、女性はモンペを脱ぎ捨て、スカートにはきかえ、スカートにはきかえることから戦後をスタートさせました。

世界の戦争史でも異例のことで、戦後の荒廃の下では、まず「食」次に「住」最後に「衣」という順序で、立ち直っていくのですが、日本の戦後は例外で、スカートが解放感のシンボルでした。

その解放感は、戦時下の抑圧が強かっただけに大きく、抑圧の象徴がモンペでした。だから、まず、モンペを脱ぎ捨て、そこで解放を表現する手近な手段が、アメリカ洋装でした。モンペを脱いだ女性によって、洋装時代がはじまり、タンスの中にしまっていた着物地や、帯地、あるいは、仕立なおしのきく洋服地は、スカート、ブラウス、ワンピースに仕立なおす更生服の時代になりましたが、その洋装願望を満たす技術が女性大衆には伴わず、戦争による空白はこの面にも大きく、この空白を埋めるのが洋裁学校でした。戦後の洋裁学校は、自分で縫うための技術を教える大衆教育の色彩が強く、洋裁学校の全盛時代が続きました。

1960年（昭和35年）の高度成長期から急速に衣料産業が発展し、1962（昭和37年）、日本にパリよりプレタポルテが入ってきました。当時日本では既製服のサイズも「Ｓ・Ｍ・Ｌ」の分類しかなく、大ざっぱなもので、体の方を服に合わせるというのが実態でしたが、1963年（昭和38年）日本で初めて、科学的データーに基づくサイズが確立し、婦人服サイズも「５・７・

11・13」と呼ばれるようになり、デザインやシルエットはフランスから、サイズや経営システムはアメリカから、つまり美はフランスから、科学はアメリカ。これが日本のファッションの骨格を作り、次第に既製服のサイズの種類も豊富になり、新素材の発明や加工技術の向上などにより、衣料商品が大量に街頭に氾濫し、国内製品に限らず欧米からの輸入品も、急激に増加すると共に若い女性は社会に進出し、経済力が高まり、衣料品に対する消費支出も急上昇してきました。

現代の日本女性の服装は自由な時代になりましたが、自由になりますと人間心理として、一般に他人と同じでありたい、ひいては集団の一員として認められたいといった、他人や集団への同調を望むと同じに、一方では自分を区別し、集団の中で目立ちたいという個性化を望む両面を手軽に表現できる服装は、一見個性化が進んでいるように見えますが、そうではなく国際社会化に流され生産、加工、流通としての社会的商品で、見ずしらずの他人が作った一着を商品群の中より選び出すだけの自由が与えられているにすぎない現代です。

2．衣服の進歩

衣服は、昔も現代も人間の身につけるものの総称であり、それをあらわす概念も変わることなく、人によってその定義が違うということもなさそうである。

進歩、向上をはかる人間の活動を通して、人間生活に役立たすように変えられ、向上してゆくものであり、「衣・食・住」は生活文化の中で最初に生まれた文化といえる。「食・住」は、動物、生物共に共通する本能的行動であるが、衣服は、人間だけが考え出した最も古い生活文化である。

服装史の資料として今日残されている世界最古のものは、エジプト時代のもので、長方形の小布を腰にまいただけのもので「腰衣型」が、最も古く原始的な型といえる。日本の服装史は、上古に始まり、中国の東北部地方の衣服に似た上下二部式で、当時の衣服は「衣裳（きぬも）」で、埴輪人形によって知ることができるが、それ以前の服装は現在までわかっていないが、最古の衣服として残っているものは、貫頭衣型であり、日本風土と畳の室での生活様式によって、和服の様式が固定して定着しておりました。生活様式が西欧式に約100年の歳月を要して現代変化し、それと共に和服から洋服へと変化してきました。

装飾には、木の実あるいは、貝類、動物の牙などを連ねて、首飾り、腕輪にしたが、これらは芸術的美的意識の源である。

現代、我々が知っている衣服は知識、信仰、芸術、習慣、経済、科学、その他の人間が、これまでに積み重ねた成果であり、現代社会において非合理で矛盾に満ちた衣服であったとしても、それは現代社会の流れの表現として受けとめることができる。

ファッションと呼ばれるものは、文明的都市的衣服であり、現代のファッションは、美醜、善悪、経済的、機能的とかの価値判断をはるかに超えた感じさえあり、芸術の世界におけるポ

ストモダニズムをねらったような傾向が、現代ファッションの名で呼ばれる衣服である。

また、現代衣服としては、宇宙服や防災服、化学服、潜水服などのように今までの人類が獲得した、あらゆる科学的知識を集結して出来た科学服もある。

このようにファッションは芸術的ファッションであり、科学的衣服として宇宙服の段階まで、現代衣服は到達している。人間の知識の進歩により深水、空間へと挑戦する時代と共に衣服も進歩の一途をたどっているといえる。

3．スカートについて

第二次世界大戦の終戦後、解放感のシンボルとなったスカートは、下半身をまとう腰衣であり、スカートは女性の衣服の歴史の中では最も古いもので、今でも原始的な形を保っている衣服の一つといえる。時代の要求や流行などにより様々に形は変わるが、基本的な形は変わることがない。基本的なものにはタイトスカート、フレアースカート、ギャザースカート、プリーツスカート、あるいは丈が長くなったり、短くなったり、裾巾が広くなったり、狭くなったり、あるいは釦、ステッチ等でポイントをおくなどして色々なスカートが製作され、家庭や職場、社交用、スポーツ用として素材とデザインで、上着と組み合わせて広範囲に着用されている。そこで歴史のあるスカートに対する意識調査をアンケートにより実施してみました。

調査方法

調査期間　昭和58年9月中旬～昭和59年2月中旬　調査対象　157名

表1　既製スカートの買入時の基準

年令		14歳以下	15～19	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55歳以上	合計
サイズ	ウエスト	4	18	22	8	17	2	10	7	7	4	99
	ヒップ	1	1	2	1	1	3	4	1	1	1	16
スカート丈		5	13	5	7	7	1	8	5	5	5	61
柄		2	3	1	6	5	0	4	3	4	1	29
形		5	20	24	4	14	2	7	5	4	4	89
色		4	18	16	4	10	3	8	8	4	4	79
布地		0	3	4	2	5	0	4	0	6	1	25
価格		3	8	12	1	8	1	6	3	3	0	45

表2　スカート丈

年令	14歳以下	15～19	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55歳以上	合計
ミニ	3	8	3								14
ヒザ下	5	17	26	9	24	3	15	11	11	6	127
ロング		5	6	1		1	2			1	16

表１の場合は回答を１つにしぼることが無理であり、希望数を集計。サイズ、形、色、丈の順に多く、年令に関係なくデザインが重視されている。

表２は持っているスカートで一番多いスカート丈は、ヒザ下が多い。これは流行がなく、一番無難な丈ということができる。ミニスカート丈では10代から20代前半の若い女性に多い。

表３　形について

年　令	14歳以下	15～19	20～24	25～29	30～39	40～49	50歳以上	合計
ギャザー	7	13	14	3	5	4	3	49
フレアー		3	2	1	2	2	1	11
タイト		13	21	6	15	19	11	85
プリーツ	5	3	11	9		6	6	40
キュロット	3	1	2	1				7

表３は持っているスカートで、一番多い形についての調査で、２種類の回答を寄せられたのも集計してありますが、表３から見まして年代の別なくタイト系のスカートが好まれ、ギャザースカートは若い年代に多くみられる。

表４　柄について

年　令	14歳以下	15～19	20～24	25～29	30～39	40～49	50歳以上	合計
無　地	5	24	23	7	22	20	16	117
シ　マ		2	1		2		1	6
チェック	3	3	9	3	2	5		25
柄		1	2		2	3	1	9

図１　色彩について

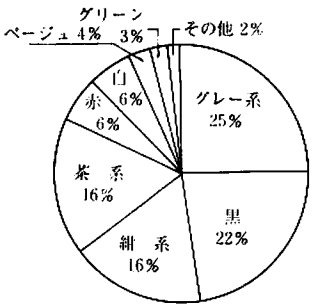

図２　布の地質について

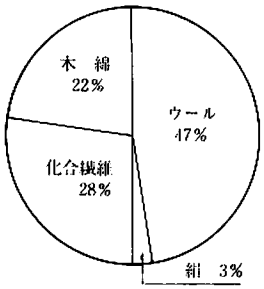

表４の柄については各年代とも無地が多いとの結果がでました。

図１の色彩についてはグレー、黒、紺、と続き、落ちついた色が好まれている。

図２はウール、化合繊維、木綿の順になっている。

表５の25～29歳を境にして、流行に左右されない人が多くなっている。

表５　流行に左右されますか

年　令	14歳以下	15～19	20～24	25～29	30～39	40～49	50歳以上	合計	%
はい	6	18	10	5	14	5	6	64	41
いいえ	2	12	25	5	14	23	12	93	59

４．まとめ

衣服の既製化により、商品撰択が重要視される現代の社会において、スカートはどのように選ばれているか、調査しましたところ、形についてはタイトスカートが多く、丈はヒザ下で、色は落ちついた無地が好まれ、素材はウール地という結果でした。

このような結果から推察して、消費生活とはいうものの流行に関係なく、上衣との組み合わせを考慮すると共に無難なスタイルが撰択されていると考えられます。終戦後、男性は戦闘帽によれよれの軍服という虚脱状態にあった頃、女性はスカートへと「衣」の立ちあがりを見せていった時代から現代のスカートに至るまで、その基本的な姿勢は変わることなく続いていると思われます。

〔参考文献〕

服飾事典	田中千代著	同文書院版	1983年
衣生活学術誌	杉本正年著	衣生活研究会	1984年4月号・6月号
よそおいの旅路	田中　宏著	毎日新聞社編集局	1985年

アンケート調査、下関女子短期大学学生が学外にて実施。